

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume

155

2024.3

公益財団法人PHD協会

～ラダさんの人生が教えてくれること～



未来を紡ぐ力

個人情報保護の為、
一部内容を伏せて掲載しています。
ご了承くださいませ。

Contents

- P.2-6 2023年度研修生レポート
 - P.2 共通研修・研修旅行
 - P.3-4 アギーさん/助産師/インドネシア
 - P.5-6
- P.7-10 ネパール出張レポート
 - 「未来を紡ぐ力 ～ラダさんの人生が教えてくれること～」
- P.11 PHD Movement vol.38
 - 「ラダさんとの再会から考えるPHD研修のこれまでとこれから」
- P.12-13 居住支援事業報告
 - 国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」便り
- P.14 PHD活動紹介 2023年11月～2024年2月
- P.15 PHD News



PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

公益財団法人PHD協会

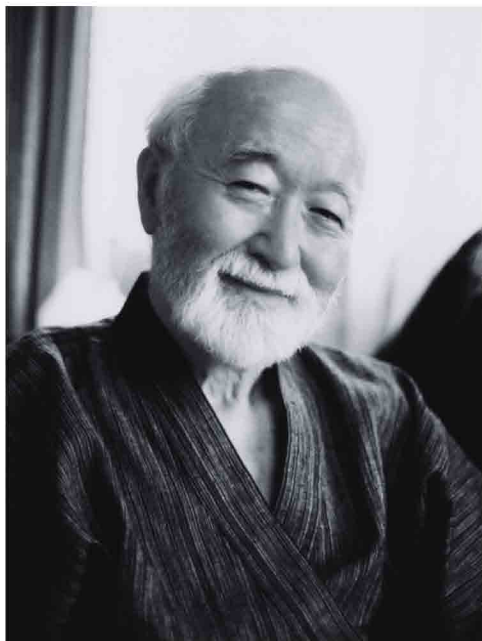
PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 155号

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒653-0836 神戸市長田区神楽町3丁目7-4
電話：078-414-7750
FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org/

表紙写真/1983年第2期研修生 ラダ デビ バンストーラさん (ネパール)

温故知新 岩村語録 その27



目は心の鏡。
いくら、お金や物を援助してもねえ

「貧困に苦しむ地域に一番必要なのは人材だ」と言い切る。ネパール時代村の青年を保健委員に選び、結核の症状や予防法、薬の投与の仕方を教え、自分はいくまでアドバイザーに。懸命に村人を治療する青年の姿と目の輝きに本当の国際支援を見た。

(引用：1993年8月10日 読売新聞
「顔 アジアのノーベル賞マグサイサイ賞受賞の岩村昇さん」)

モノやカネの援助ではない道を選んで40年強。草の根の人たちが目の輝きを生み出すお手伝いを今後もしていきたい。

(さ)



左上写真/アジアを考える会北九州・祝町小学校地域の皆さんと交流会にて
右上写真/西日本研修旅行宮崎港にて
右下写真/だるま保育園で園児と交流する様子

PHD 2023年度研修生レポート

事務局長 坂西卓郎＝文

2023年度の研修事業が無事終わりました。今年度も研修指導者、ホストファミリーの皆さんをはじめ、多くの方々に時間と技能を捧げていただき行われた研修でした。この場をお借りしてお世話になった皆様に感謝申し上げます。

今年度の特徴は「脱コロナ」でした。もちろん感染症対策には気を付けながらですが、昨年度に比べてもよりコロナ前の研修に近づくことができましたと思います。そんな中、研修に真摯に取り組んだ二人の報告をぜひご覧ください。

2023年度 共通研修

- ・三木市総合保健福祉センター（保健衛生/三木市）
- ・浜地律地さん（口腔衛生/神戸市）
- ・山梨YMCA（インクルーシブ教育/山梨県甲府市）
- ・イエズス会社会司牧センター（釜ヶ崎/大阪府大阪市）
- ・淡路島モンキーセンター（残留農薬/洲本市）
- ・コープこうべ協同学苑（協同組合/三木市）



山梨YMCA（共通研修）にて

2023年度 研修旅行

東日本研修旅行 10月29日～11月1日

- ・東京都 全日本自動車産業労働組合総連合会、日本労働組合総連合会、日本ユニセフ協会、ロータリー米山記念奨学会
- ・山梨県 山梨YMCA、山梨英和中学校
- ・岐阜県 中濃教会

西日本研修旅行 1月14日～1月21日

- ・鹿児島県 だるま保育園
- ・熊本県 水俣市立水俣病資料館、水俣病センター相思社、遠藤邦夫さん「地元学」講話、エコネットみなまた、国立療養所菊地恵楓園、一般社団法人きぼう・未来・水俣
- ・福岡県 祝町小学校、アジアを考える会北九州、世界平和パゴダ、北九州市環境ミュージアム
- ・山口県 岩国みなみワイズメンズクラブ
- ・広島県 広島平和記念資料館、原爆ドーム、一泰治さん、平和記念公園
- ・岡山県 高木唱洋さん



右写真/初めての雪を楽しむアギーさんとチェリーさん

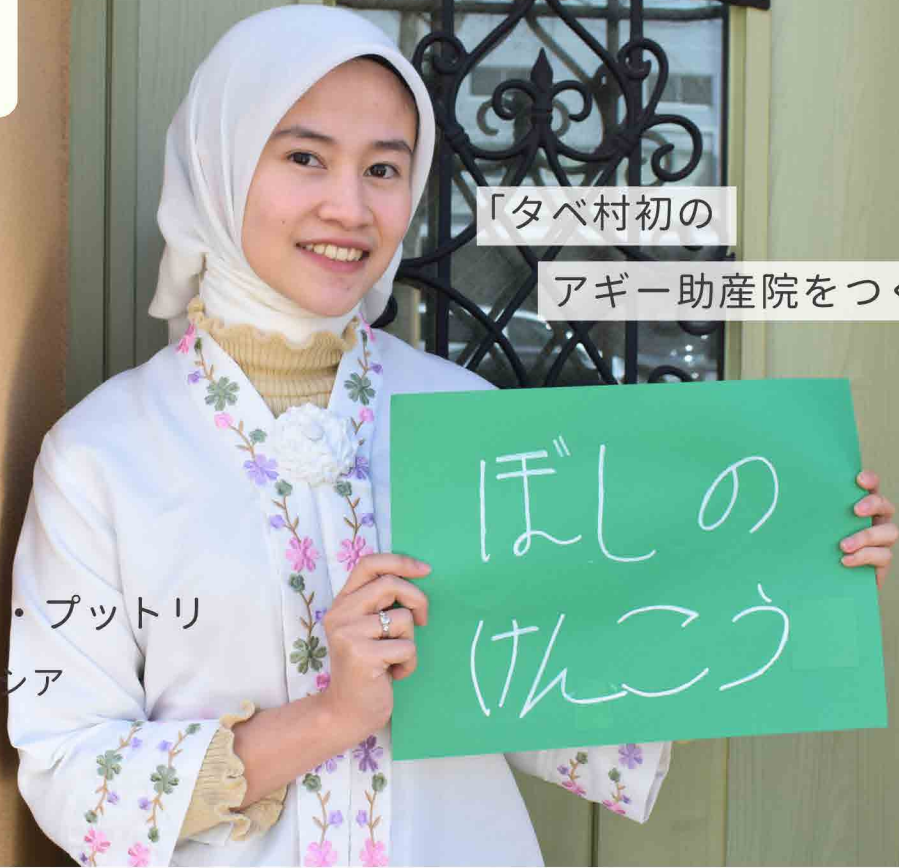
PHD
2023年度
研修生レポート

PHD協会

「タベ村初の

アギー助産院をつくりたい」

アギー・ラミダ・プットリ
助産師 / インドネシア



研修担当 濱宏子=文

エコーを持たない助産師

酷暑の名残を留める10月、奈良のとある高名な助産師の先生がアギーのレオポルド(妊婦触診法)を見て「マリア様の手」と評してくださった。受け入れ先の難しいエコーの研修を何とか数多く出来ないものかと考えていた私の意識を大きく変えて下さった言葉である。思い返せばどの先生方も助産師は最後は手なのだ、と仰ってくださった。その意味に私もアギー自身も気がついた秋だった。まずは手の感覚を研ぎ澄まし、エコーは最後の手段とする。

そしてアギーの意識はこの頃から周産期ケアに大きく方向転換する。日本ならではの丁寧な産後ケアやベビーマッサージ、父子教室、妊婦ヨガ、そして大切な栄養指導。メモを取る手はひと言も聞き漏らすまいと真剣であった。持ち帰る学びの大きさはアギーのトランクいっぱいとなり、益々村での助産師としての役割を再認識する研修

となった。酷暑の中を歩き助産院を巡った記憶はアギーの大きな力となって未来のタベ村を支えていく事だろう。

アギーの挑戦

助産院建設はアギーの夢であるが、それは一朝一夕には叶わない大変に大きな夢だ。当初3年から5年後と想定していたその夢を10年から15年後とアギー自身が軌道修正している。子だくさんの村のニーズに応えるべく、アギーは帰国後自己研鑽の時期に入る。学んだ事をどれだけ昇華させる事が出来るのか、日本の周産期のケアが小さな村にどこまで受け入れられるのか、試行錯誤を重ねていく事だろう。アギーの、そして村の子どもたちの未来に幸多かれと祈る。



11月～3月研修

- ・徳永愛子さん (手芸/神戸市)
- ・あみ助産院 (助産/京都府城陽市)
- ・徳廣マッサージ院
(マッサージ/京都府京田辺市)
- ・芽愛助産院 (助産/奈良県天理市)
- ・シオン保育園 (保育/島根県隠岐郡)
- ・シオンの園ございな
(ハンディキャップケア/島根県隠岐郡)
- ・ステップハウス
(ハンディキャップケア/高砂市)
- ・アメニティーホームルピナス高砂
(児童福祉/高砂市)



1年間の研修を終えて

日本の1年間のけんしゅうで「おはなだ」で、ほしほけん、しゅうせん、エコーのつかいかた、テレミスコアセラピー、ヨガ、ベビーマッサージ、ほしのえいそうバランス、リハビリ、しゅうせんについてたくさん学びました。そのほかしゅうせんにかんすること。

しゅうせんがくたけでなくほしえん、じどうようごしせつ、しゅうからごう、がくじどう、しゅうがいのおしゅうなどでも学びました。このけんしゅうでも学びました。

日本ではおおくしゅうせんをほうもんしほけんセンターやさんふじんがひょういんもほうもんしました。

わたしは日本でエコーについてべんきゅう

しました。たいじのはついくをかんせつするためにはエコーがたいせつだとべんきゅうけがらおもいましたが、しゅうせんにとってはこれがたいじのためで、このけんしゅうはほんとうにたいせつです。日本にこるまえわたしは1年はんくろりおらではたらき、おおくのけんしゅうせんをじぶんのことでしゅうせん、あかちゃんかかんけんきにべんきゅうせん、おあやもけんこうのことでもしゅうせんからたてです。

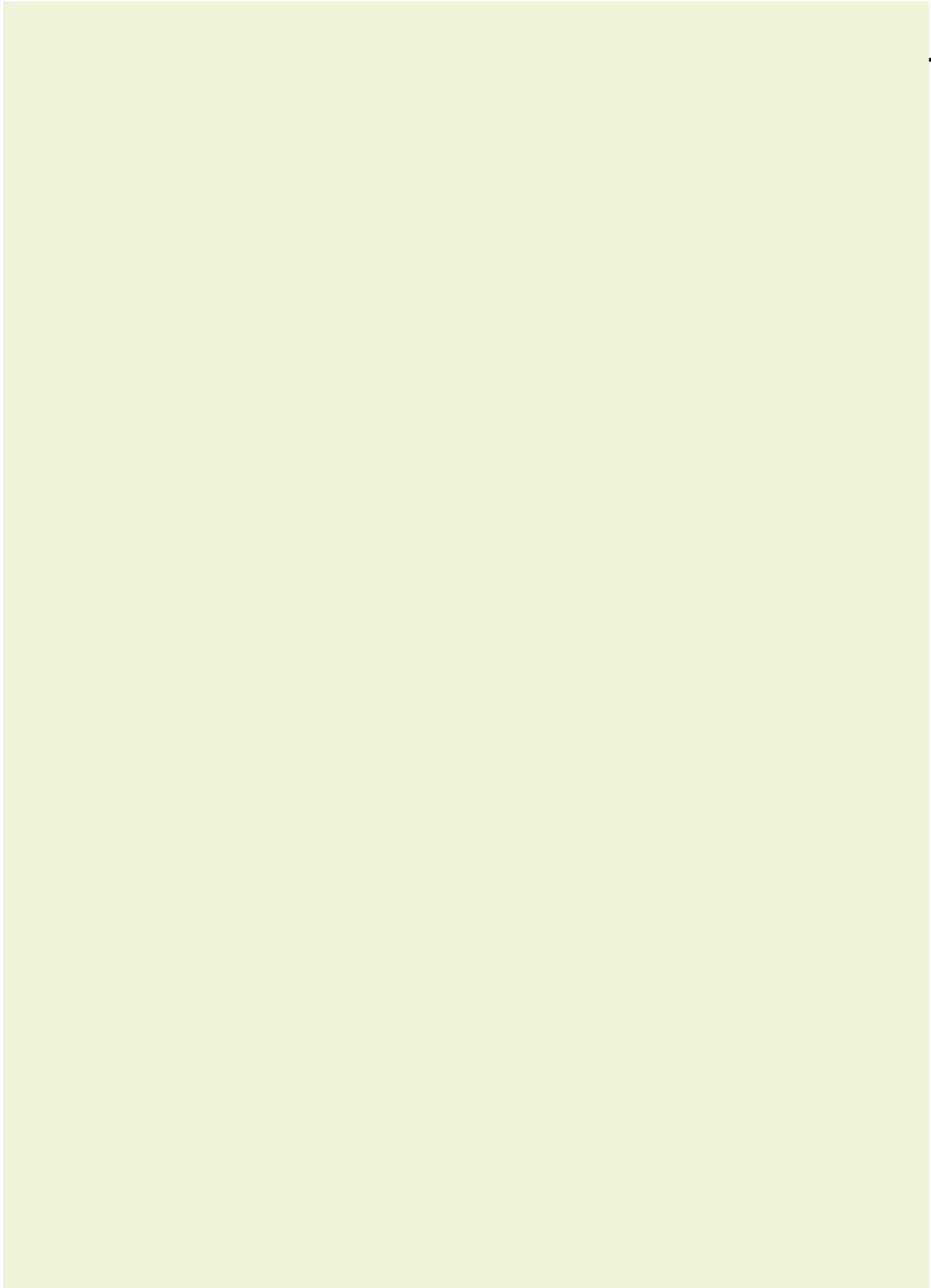
日本でおおくのことをまなぶことができてよかったです。わたしがであったしゅうせんせんはみなとてもしゅうせん、わたしをサポートしてくれたいけんおらにたてたら、日本でまなぶことをいかにたいけんおらの人におしゅうせんたいとおもっています。

アギーラミダアットリ
インドネシア



応援メッセージ（研修担当：濱）

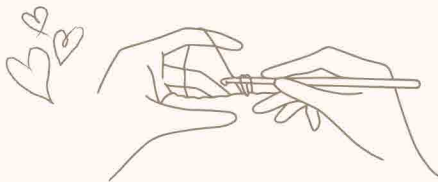
聡明で優しくそして頑張り屋のアギー。研修担当として1年間どれだけあなたに助けられたか分かりません。学んだ全てを糧とし、美しい笑顔を絶やさず、アギーらしく歩いて行って下さい。あなたの未来は村の未来です。





広報・啓発担当 井上遼香=文

2023年12月、ネパールのポカラで第2期研修生であるラダさんと4年ぶりの再会が実現しました。長年にわたり、地域の貧困女性の生活向上に尽力してきたラダさん。その功績はラダさんの人間性と努力の賜物であり、ラダさんの活動は地域社会に大きなインパクトをもたらしました。ラダさんの人生はまさに利他愛に溢れた奉仕の物語であり、その光輝く足跡は私たちに多くのことを教えてくれます。深い尊敬の念を胸に、ラダさんが紡いだ人生物語をご紹介します。



1983年・第2期研修生
RADHA DEVI BANSTOLA
ラダ デビ バンストーラ さん

I 幼少期の結核からの生還

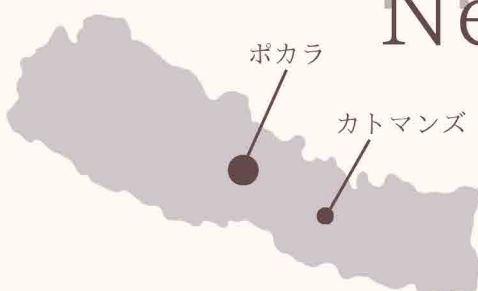
1945年1月1日、ネパール・ポカラの地でラダさんは誕生した。10歳の頃、ラダさんは結核に罹患。当時、地域には公立病院がなく、結核は深刻な病として恐れられていた。多くの人が亡くなる中、イギリスのNGOが運営する病院から無料で薬が提供されるという奇跡的な出会いがラダさんの命を救った。この経験は後のラダさんの人生に大きな影響を与えることになる。

II 逆境を乗り越えた学びの旅

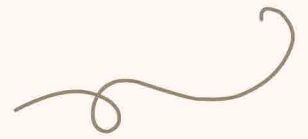
両親が別居し、貧しい母子家庭で育ったラダさん。母は小作農をしていた。女性の地位が低い時代背景もあり、10歳まで勉強の機会はなかったが、近所の裕福な友人の誘いを受けて学校に通い始めた。また、1951年に教育省が設置され、無料で通える公立学校がポカラで開校したことも後押しした。学校ではネパール語、英語、算数などを勉強した。ラダさんは勉強が好きで大変優秀な成績だった。しかし当時は就学率0.9%・識字率2%と、教育の必要性に対する社会的な認識が不足していたうえ、女子教育への地域からの偏見もあった。実際にラダさんのクラスメイトもほとんどが男子で、女子は差別的な目で見られた。しかし、母親は女性が学校に通うことは素晴らしいことだとラダさんを支え続けた。

その後、14歳でその学校を離れ、別の学校で生地を編む技術を学び始めた。成績優秀者としてカトマンズへ1年間の留学が叶い、そこでは靴下を編む技術を学んだ。毎月100ルピーを支給されたが、カトマンズで生活するには足りない金額だった。節約の為に職場までバスを使わずに毎日歩き、食事を我慢することもあったとのこと。勉強する為にここに来ている、と何度も自身に言い聞かせ、苦しい時期を過ごしながらもラダさんは学びを止めることはなかった。

नेपाल
Nepal



～ラダさんの人生が教えてくれること～



写真/ラダさんとお手製のベスト（2023年12月）



写真/岩村先生とラダさん（1983年研修生時代）



写真/岩村先生とラダさん（2001年20周年記念事業にて）

「必ずしも人にあげよう」の心をネパールでもひろげたいです。ありがとうございます。じいさま (ラダ バンスレー)

(引用：1984年3月15日発行 PHDLetterNo.10)

1945年1月1日、ネパール・ポカラ生まれ。15歳から編物を学び、17歳で編物教師になる。幼少期に結核を罹患した経験から結核予防会のメンバーとしても活動。ネパールで岩村先生と出会い、38歳の時にPHD協会第2期研修生として来日。手工芸や婦人の社会活動を学ぶ。帰国後はセティ川沿いの貧困地域で女性たちに編物を教える活動を展開。地域全体の生活向上に長年貢献してきた。

III 教育者としての軌跡

政府がポカラに新しく学校を設立。その学校で17歳から教育者としてのキャリアをスタートさせた。給与は180ルピーで、生徒たちは村々から来ており、中には教育を受けていない人もいた。ラダさんは27年間にわたり、多くの生徒たちに洋裁、編物、刺繍など、様々なスキルを指導した。

幼少期と同様、女性が学校に通うことは難しかった時代にラダさんは働きながら夜間学校に通った。そこで人生の伴侶となる方と出会い、21歳で結婚。4人の子宝に恵まれた。子育て、仕事、夜間の学校通いの忙しい時期でも、ラダさんは家族のサポートを受けながら、学び続けることへの情熱を忘れることはなかった。



写真/生徒に編み機の使い方を教える様子（1980年代）

IV PHD協会との出会い

ラダさんは幼少期に結核に罹患した経験から、結核予防会の一員として結核患者やハンセン病患者のために活動していた。岩村先生がタンセンで結核患者のお世話をしていることを知り、カトマンズで開催されたPHD協会の面接に参加。岩村先生との出会いが、ラダさんの人生に新たな局面をもたらした。

ラダさんは初対面の岩村先生について「顔を見ただけで会話はできませんでしたが、何かが始まる予感がしました。」と当時を振り返る。面接では当時のスタッフがラダさんの夢に耳を傾けた。地域の女性たちに学びの機会を提供し、編物や洋裁を通じて生活の向上を願う熱い思いを伝えた。スタッフは「I will see you soon in Japan」と言葉をかけ、その瞬間日本への旅路がラダさんの前に広がった。その喜びに満ちた瞬間を忘れたことはない、とラダさんは微笑みながら語ってくれた。

当時ネパールでは女性が海外に行くことは珍しかったが、家族は反対することなくラダさんの夢を応援した。「夫はNGOの仕事をしていたので、私の決断を理解してくれました」と家族の理解に感謝の意を述べた。



写真/地域で活動するラダさんの様子 (1990年代)

V 日本での学びと紡がれた絆

1983年来日。8カ月間の研修期間中には、さまざまなスキルを身につけ、日本人との友情を深めた。編物や洋裁の技術だけでなく、平和や健康についても学んだ。ラダさんは非常に意欲的で、移動中のバスや電車でも編物をしていた。また、日本語の単語も積極的に覚えた。日本での限られた学びの時間を大切にしていた。

特に印象深いのは、ホームステイや洋裁研修でお世話になった岩佐先生との交流。岩佐先生からは「努力しなければ何も成し遂げられない」という教訓を受け、その言葉に励まされた。岩佐先生のもとでの経験が帰国後の活動に大きな影響を与えている。

VI 地域社会にもたらしたインパクト

帰国後、ラダさんは以前と同じ学校で編み物を教える仕事に復帰し、その傍らでPHD協会のサポートを受けながらセティ川沿いの貧困地域で活動を始めた。最初はわずかな資金で毛糸を購入し、約40名の女性たちに編物を教える活動を展開。ラダさんの生徒たちは自分で編んだセーターで収入を得て、それを生活の助けとした。編物で得たお金で、子どもに本やノートを買うことができた母親もいた。地域の女性たちはラダさんを心から慕い、尊敬し、「アマ（お母さん）」と呼ぶ。生徒たちの生活が向上することがラダさんの大きな喜びだ。

ラダさんは地域の女性たちに編物だけでなく、女性が学ぶことで経済的に自立することの重要性を伝え続け、字や計算も教えた。その功績に対して、ラダさんは政府から数々の表彰を受けた。一方で、ラダさんの活動を良く思わない人たちが陰口をたたくこともあった。しかし、ラダさんは「努力しなければ何も成し遂げられない」という岩佐先生の言葉を何度も自分に言い聞かせ、根気強く何十年も活動を続けた。

幼少期に学ぶ機会が限られていたラダさんが、帰国後は地域社会に貢献し、教育の重要性を広く認識させる存在となった。ラダさんの情熱と貢献が、地域社会全体に希望と前進の光をもたらした。



(2023年12月)

ラダさんの活動地域 セティ川沿い



(1990年代)

地域の女性に編物を教えるラダさん





VII ネパールの未来へ愛を込めて

ネパールでは今、多くの女性が学校に通い、女性の地位向上が進んでいる。国全体で見ても義務教育就学率は9割を超えている。女性も男性と同じように未来への夢を抱き、教育を受けることができるようになった。ラダさんが懸念するのは、女性たちが教育を通じて力を得た一方で、その力の使い方が利己的になっていること。ラダさんは、教育制度に道徳の勉強がないことを指摘し、ボランティア活動を通じて社会に貢献することの重要性を訴えている。

ラダさんはネパールの若者に対して伝えたいことがある。「ネパールの課題に真摯に向き合い、ボランティアの心を持って活動してほしい。ネパールの未来への道は、皆で協力し、心を合わせることでより輝かしいものになることでしょう」ラダさんのこの言葉には、母国への深い愛情が込められている。



1997年・第15期研修生
サビトリ シュレスタさん

サビトリさんは来日前、ラダさんの生徒でした。ラダさんと初めて出会ったのは23歳頃。ラダさんを通じてPHD協会と出会い、日本の編物に触れ、自分も学びたいという思いが芽生えました。PHD協会の面接に合格し、阪神淡路大震災の2年後に日本へ渡りました。その時の街の復興ぶりには驚かされたと当時を振り返ります。



右写真/「今もYouTubeで編物を学んでいますよ～」とスマートフォンを使いこなすラダさん (2023年12月)

-最後に-

ラダさんの人生の物語は、編物のように細やかに織りなされてきました。80歳を迎えるラダさんは未だに学びと教育への情熱を失っておらず、地域社会に夢と希望を与え続けています。

「目が見えなくなるまで編物を続けます」と満面の笑みで力強く語ってくれたラダさん。ラダさんの人生は、教育がどれほど人生を豊かにし、未来を切り開く力を持っているかを象徴しています。そして、時代の逆風にも負けず歩み続けてきたラダさんの勇気ある物語は、後世に大切に語り継がれるべきものであり、ネパールの明るい未来へ繋ぐ希望の糸なのです。

ラダさんが紡いできた人生に最大限の敬意を表し、PHD協会はこれからもアジアの人々と共に歩み続けます。

日本では洋裁、編物、栄養について学び、帰国後はラダさんと共に地域の女性たちに洋裁や栄養の知識を広めました。生徒だった人が他の人にも知識を伝え、地域全体で生活が向上したことは素晴らしい経験だったと語ります。

現在は日本語学校で教鞭をとっています。学生たちには日本語だけではなく、日本で頻繁に使用される漢字や日常生活に関することなど、自らの経験を惜しみなく伝えています。

「私はこれからもボカラで、未来の人材育成のために頑張りますよ～！」と明るい笑顔で未来を見つめていました。



写真/サビトリさんと日本語学校の生徒 (2023年12月)

ラダさんとの再会から考えるPHD研修のこれまでとこれから

ラダさんがもたらしたインパクト

2023年12月、ネパールのポカラにてPHD協会の第2期研修生であるラダさんに再会できた。コロナ禍が始まって以来会えていなかったため、約4年ぶりとなる。久々に会ったラダさんは膝を悪くしていたものの、以前と変わらない笑顔で迎えてくれた。ラダさんの人を温かく包み込む力は誌面では表現できない。大げさではなく世界の偉人や聖人と言われる人が纏っている空気なのでは思う。そして今なお衰えず社会貢献の意欲に溢れていることにもまた驚かされる。

ラダさんは1983年に初の女性研修生として来日。38才だったそうだ。詳細はインタビューに譲るが、当時女性が教育を受けること自体が難しく、ましてや日本に行って学ぶということは「大冒険だった」と語る。日本では「私の住んでいるポカラという街の女性は、都会の女性と比べ学ぶ機会も与えられず、ずいぶん低い生活をしている。そういった女性たちに一つの仕事が完全に身に着くようお手伝いしたいと思っています」(PHDLetterNo. 8)

と高い意欲で学んだ。帰国の際には「私は日本に来て8ヶ月間、勉強しました。いろいろなことをポカラや村の貧しい人たちに教えます。口で話すのは易しい、教えるのは難しいが努力します。私はPHDの『10%を貧しい人に捧げましょう』の心をネパールでも広げたいです」(PHDLetterNo.10)と語り、ポカラへ戻った。

それから40年、地域の貧困女性の生活向上やエンパワーメントに地道に尽力し、計り知れないインパクトをもたらした。洋裁だけでなく識字教育も行い、女性たちの自立を後押しした。

「ラダさんはポカラの有名人。今なお皆がラダさんのことを尊敬している」とサビトリさん(15期生・1997年研修生)は語る。

ラダさんの招聘と帰国後の活動は、明らかにPHD協会に関わった人たちの草の根交流がもたらした特筆すべき成果の一つだったと言える。



写真/左から坂西、岩村史子さん、ラダさん (2018年)

ネパールと研修生招聘事業の未来

しかし時は40年進み、世界もネパールも大きく変化した。

2022年のネパール労働移住報告書によるとネパールの人口の7.4%が海外在住となっている。2021年の国勢調査では全世帯の23.4%に海外に住む家族がいるとなっている。結果、出稼ぎ収入は国内総生産(GDP)の23.8%に相当する。この数字は世界第5位とのことだ。同時に17.1%の子どもが父親と離れて暮らす、となっている。

つまり家族が一緒に居ることよりも親が出稼ぎに行き、子どもたちに良い教育を提供することがネパールの日常となっている。それらはポカラで乱立する日本語学校や、神戸に来る多くの留学生からも強く感じる。それは圧倒的な時代の流れであり、その激流はますます激しさを増している。

そのような中、PHD協会が目指す草の根交流や「10%を他者に捧げる」がどのように機能するのか。ラダさんにも相談してみたが、そこに答えはなかった。PHD協会初代理事長である今井鎮雄先生は「いつまでも同じことをやっていてはだめだ。社会の変化に合わせて新しいことに挑戦しなさい」と指針を残してくれた。ラダさんとの再会を機に、温故知新、過去を踏まえつつ新しい道を模索していきたい。

写真/地域の女性たちに編物を教えるラダさん (1980年代)



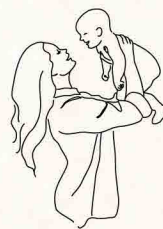
居住支援 事業報告

PHD協会では、生活にお困りの外国人を対象に居住支援や就労支援、食料支援、日本語学習支援、生活相談を行っています。下半期は、難民申請者や技能実習生、留学生、ウクライナ避難民の方々の支援に注力しました。本稿では、これらの活動のうち、下記の2つについてご報告致します。

1 カメルーン人の難民申請者、出産から子育てまで

昨年5月からカメルーン人母子への同行支援を中心に生活全般のケアを行っています。彼女は難民申請者であり、シングルマザーです。私たちが相談を受けたとき、出産を間近に控えた彼女の所持金は35,000円程度。日本での出産やこれからの生活に大きな不安を抱えていました。また、日本語があまり話せないこともあり、相談できる相手がおらず、孤立に近い状態でした。

そこで、まずは出産に備え、困難な状況で出産を迎える女性たちを受け入れるシェルターへの入居を支援。出産後は、病院での通訳や保育所への入所支援、生活保護申請のサポートなどを実施しました。現在も継続した食料支援及び日本語学習を通じて見守りを行っています。



上写真/出産に関する専門家施設を訪問。通訳サポートを実施



右写真/日本語学習の様子

2 食料配布会の継続



上写真/食料配布会に参加したミャンマーからの留学生と梅光学院大学インターン生
左下写真/食料配布会に参加したウクライナ避難民
右下写真/配布用の食料など

昨年10月から月1回実施している食料配布会では、近隣の日本語学校で学ぶミャンマーやネパール、バングラデシュ、スリランカの留学生やウクライナ避難民を中心に食料や冬用衣類を配布しました。配布会について神戸新聞に取材をしていただいた際には、ミャンマー人留学生から「二つのアルバイトを掛け持ちしてなんとか生活費を捻出しているので、こういう場はとても助かる」といった声が聞かれました。



神戸新聞
2024年2月22日

地域の高校生が自分たちで育てた野菜を寄付してくれました♪

▼食料配布会参加人数

	10月	11月	12月	1月	2月
参加人数	48名	42名	53名	50名	36名



つづき

今後も継続した実施を目指していますが、配布会の継続及び配布物の充実には皆様からのご協力が欠かせません。現在当会では配布するお米のご寄付を郵送（送料もご負担願います）もしくは当会まで直接お持ちいただける場合に限り受け付けています。

また、Amazon「みんなで応援」プログラムに参加しご寄付も募っています。このプログラムは、全国各地で物資の支援を必要としている団体をAmazonを通じて支援できるプログラムです。皆様のお力をお借りしながら、支援の手をさらに広げていきたいと思っておりますので、どうぞお力添えを宜しくお願い致します。

この原稿執筆時の2月は、ミャンマーに非常事態宣言が出て3年、ウクライナへの侵攻が始まってからは2年という節目の時期でした。世界には未だ戦禍が絶えず、祖国を憂慮し悲しみに暮れる人が多くいることを日々の活動の中で常々感じています。居住支援事業を通じて、祖国を想う在住外国人の方たちに私たちが寄り添うことができるのは、ひとえに皆様のおかげです。今後とも末長く温かい応援をよろしくお願い致します。

※本事業は赤い羽根「居場所を失った人への緊急活動応援助成」第6回、公益信託神戸まちづくり六甲アイランド基金の助成を受けて実施しました。

Amazon「みんなで応援」プログラム

このプログラムは、全国各地で物資の支援を必要としている団体・施設・個人を、Amazon.co.jpを通じてサポートできるプログラムです。

PHD協会が作成した「ほしい物リスト」から商品をご購入いただくことで、物資の支援が行えます。

支援方法

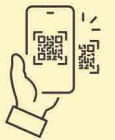
こちらからアクセスできます▼

Amazonホームページ
「Amazonみんなで応援プログラム」
のページにアクセス

▼
PHD協会は
「兵庫県」で見つけやすいです！

▼
商品をカートに入れる・購入

▼
PHD協会に商品が届く



写真/小野加東ロータリークラブ 飯尾さんからのお米



国際交流・協カシェアハウス「みんなのいえ」便り



支えられて3年半

2024年が明けてから、嬉しいことにたくさんの方がマンスリーサポーターに登録してくださった。月々1,000円でこのシェアハウスを支えてくださる応援隊の皆様である。居住者の光熱費や食費はここから賄われることになる。PHD協会が安心して困窮者を支えていけるのは縁の下にサポーターの皆様がいてくださるからである。昨年末シェアハウスにやって来た陽気なチュニジアの兄弟がいたのだが、駅で2週間野宿していた事など笑いで吹き飛ばし暫しの共同生活を楽しんでくれた。今後も色々な事情を抱えた外国人に寄り添い支えて次の新たなゴールへと送り出す。笑顔のエールを添えて。

みんなのいえ施設長 濱宏子=文





PHD 活動紹介 2023年11月～2024年2月

11月

- 1日 東日本研修旅行（10月29日～）
- 2日 インドネシア人1名みんなのいえ入居
- 6日 自動車産業労働組合総連合会授賞式 参加
- 7日 かめのり多文化共生塾（～8日）参加
明石城西高校 講演
- 8日 篠山ロータリー例会 参加
第2回食料配布会 開催
- 9日 HYGON運営委員会 参加
NGO-JICA勉強会「多文化共生事業におけるNGOとJICAの協働の可能性」参加
- 10日 ワンフェスユース・アドバイザーグループ会議 参加
- 11日 下町芸術祭 ボランティア参加
神戸市シルバーカレッジ国際交流友の会 交流会
- 13日 丹波市国際交流協会会議 参加
- 15日 公益法人連絡会 参加
- 16日 N連タスクフォース報告及び意見交換会 参加
- 18日 SDGsアクションプランコンテストブラッシュアップ会 参加
- 20日 HYOMIC幹事会 参加
- 22日 友が丘高校 来訪
- 23日 大阪YMCA大会 参加
仙台観光国際協会/宮城県国際化協会/JICA東北 訪問
- 25日 ひょうごコミュニティ財団10周年記念フォーラム 参加
- 26日 ESD推進ネットひょうご神戸総会 参加
- 27日 HYOMICセミナー 参加
- 29日 「ミャンマー難民は今」YMCAセミナー 参加
梅光学院大学インターン生受入れ最終日（10月2日～）
- 30日 神崎ロータリー卓話 参加
オルタナティブツアー 来訪

12月

- 1日 定例スタッフ会議
川西ロータリー例会 参加
かめのり「多文化共生の転換期」セミナー 参加
- 2日 神戸YMCA国際委員会 参加
ひょうごコミュニティ財団 相談員
- 5日 神戸YMCA役員研修会 参加
- 6日 ワンワールドフェスティバルユース・アドバイザーグループ 参加
兵庫県ユニセフ協会評議員会 参加
多文化共生セミナー打ち合わせ 参加
かめのり「多文化共生の転換期」セミナー 参加
神戸YMCA「ドイツにおける難民の受け入れ」セミナー 参加
- 7日 第3回食料配布会 開催
すまいるネットインタビュー撮影
- 8日 神戸龍谷高校 来訪
PHD協会 2024年度計画会議
- 10日 神戸YMCA国際協力募金 参加
- 11日 NGO神戸外国人救援ネット理事会 参加
かめのり「多文化共生の転換期」セミナー 参加
いたみ杉の子 訪問
チュニジア人2名みんなのいえ入居
難民事業本部 来訪
- 13日 ネパール出張（～21日）
- 15日 阪神自動車専門学校スピーチ大会 参加
HYOMICユースキックオフ 参加
- 19日 川西ロータリークリスマス例会 参加
- 20日 篠山ロータリークリスマス例会 参加
- 21日 国際ソロプチミストクリスマスコンサート 参加
プラスONE 交流会
ベトナム人2名みんなのいえ入居
- 22日 HYOMICユースミーティング 参加
神戸新聞取材
- 25日 PHD協会 定例スタッフ会議
- 27日 PHD協会 忘年会・大掃除
- 29日 中野宗嗣さん餅つき会 参加

1月

- 7日 カレンニューイヤーパーティー 参加
- 9日 HYGON運営委員会 参加
- 10日 第4回食料配布会 開催
- 12日 神戸市地域協働局 来訪
JICA関西 来訪
- 13日 西日本研修旅行（～21日）
持続可能な地域をつくる成人学習・教育と開発教育（～14日）参加
- 16日 社会福祉×多文化共生「実践者から聞く連携体制づくりのためのヒント」ミーティング 参加
- 18日 HYOMICユースミーティング 参加
- 19日 セーフトラベルセミナー 参加
- 23日 ひょうご国際交流団体連絡協議会10周年記念事業 参加
- 24日 彩星工科高校 来訪
HYOMICユースミーティング 参加
- 26日 神戸市居住支援協議会総会 参加
- 28日 セミナー「そのとき市民が動いた～近代日本の市民社会をひらいた人々」参加
SDGsフェア「ミャンマーに平和を！語りと祈りの集い」参加
社会福祉×多文化共生「実践者から聞く連携体制づくりのためのヒント」参加
- 30日 かめのり多文化共生塾（～31日）参加

2月

- 1日 HYOMICユースミーティング 参加
- 2日 PHD協会 定例スタッフ会議
青年海外協力協会（JOCA）中西雅美さん 来訪
- 4日 三田市国際交流協会防災リーダー養成講座① 参加
- 6日 ひょうごコミュニティ財団相談員会議 参加
NGO組織強化シンポジウム「NGOの組織強化はなぜ必要か」参加
コープこうべフードドライブ協議会 参加
- 7日 第5回食料配布会
神戸新聞取材
神戸市地域協働局 来訪
彩星工科高校 来訪
PREX×JICA関西シンポジウム「世界とともに歩む」参加
- 8日 キフブDIYプログラム成果報告会 参加
HYOMICユースミーティング 参加
- 11日 三田市国際交流協会防災リーダー養成講座② 参加
- 14日 PHD協会 運営協力委員会・理事会・評議員会
- 15日 加東市連合婦人会 交流会
- 16日 川西ロータリー例会 参加
HYOMICユースミーティング 参加
- 17日 中日本YMCA役員等研修会 参加
- 20日 神戸新聞取材
- 21日 HYOMICユースミーティング 参加
- 22日 2025学年度米山記念奨学事業説明会 参加
NGO神戸外国人救援ネット 丹波移動相談会 参加
- 25日 日本YMCA同盟ウクライナ避難者支援プロジェクト 参加
HYOMICユースミーティング 参加
- 28日 川西ロータリー送別会 参加
- 29日 PHD協会 定例スタッフ会議
HYOMICユースミーティング 参加
ミャンマー人1名みんなのいえ入居



PHD協会忘年会

PHD News

2024年度 来日報告会のご案内

2024年3月下旬に来日した第40期研修生たちの来日報告会を行う予定です。1年の学びへの抱負、地域での生活の様子などを発表いたします。お誘いあわせの上、ご参加ください。

日時：2024年6月1日（土）
14：00～16：00（予定）

場所：JR新長田駅周辺

参加費：無料

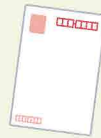
◎お問い合わせはPHD協会まで◎
TEL：078-414-7750
E-mail：info@phd-kobe.org



リザさん/インドネシア
研修内容：農業、協同組合

書き損じはがき、未使用切手、使用済切手などを集めています！

PHD協会では以下の物品を集めています！書き間違えた年賀状やもう使わない昔の切手など、お家にございませんか？捨ててしまう前に、是非PHD協会にお送りください。PHD運動のために大切に用させていただきます。



●未使用切手・はがき

当会の各種発送物の郵送料となります。

●書き損じはがき

新しい切手・はがきに交換後、各種発送物の郵送料となります。

●使用済切手

1kg=約1,000円になります。研修生の招聘・研修などの活動費となります。

～ご支援エピソード～

「家の片付けをしていたところ、昔集めていた切手のコレクションアルバムが出てきたので段ボール2箱分お送りします」

査定後…

10万円

のご寄付となりました。

1年を振り返って ○月×日のPHD協会

濱 研修担当として子どもの頃から知るアギーと親子のように過ごした1年。方向感覚の優れたアギーに「ママ！快速電車はこっち」と教えられた日々。

田村 支援者Aさんからの手紙。「問題に対して無関心・無気力にならないために、PHDは希望の灯を掲げて」とのメッセージに力をもらった日々。

井上 入職して早一年。一般企業でお金の計算ばかりしていた私が海外出張2回。自分の興味関心を仕事にできることが幸せ。予測不能な日々も面白い。

中村 今年度は内勤中心から一転、初の海外出張でネパールへ。ラダさんと出会い、視野を広げる一年に。PHDはどう活動すべきか、可能性を感じた。

上から、
1年間の総移動距離が長い順

SNSで日々の活動を更新中。
ぜひ見てくださいね！
理事長も見ています！



PHD協会理事長 水野

2023年度もPHD協会の活動を応援していただきありがとうございました



写真/第39期研修生帰国報告会（2024年3月2日）